

桂川連理 柵

宝暦十一年（1761）、京都の桂川において、三十八歳の男と十四歳の少女の水死体発見。殺害されたようですが、すぐに心中事件として浄瑠璃に取り込まれ、歌舞伎となり、歌謡となって広く知られた、お半・長右衛門の物語。その代表的作品が、安永5年（1776）、大坂の北堀江市ノ側の芝居で初演された菅専助の上下二巻の世話物で、今回も「覧いたたくのは下の巻、道行は原作にはなく、のちに補われたものです。

長右衛門は、帯屋繁齋の養子で、お絹と結婚して十年、子供はなし。お半は、隣家の、長右衛門の恩人の娘で、幼いときから長右衛門を慕っています。この二人が旅先でやむなく同じ布団に。そして間違いを犯し、お半は妊娠。我が子のようなお半への取り返しのない、また、亡き恩人を裏切り、妻にも言い訳できない過ちに、苦悩する長右衛門。

一方、繁齋の後妻とその妻子儀兵衛は、店の乗っ取りを画策。長右衛門を追い出そうと、盗みの罪をなすりつけ、旅先での関係を記したお半の手紙を読み上げ、大騒ぎ。追い詰められた長右衛門を救ったのは、噂でお半ののを知って苦しみながらも、夫を大切に思うお絹でした。

過ちを苦にして長右衛門が自害するのを恐れ、堪えて生きるよう意見する養父、いつまでも夫婦だと訴える妻。けれども、お半の妊娠に加え、もうひとつ、死んで責任を取らねばならない難題を抱えた長右衛門は、既に死を覚悟していました。お半もまた妊娠と長右衛門への叶わぬ恋に悩み、身を投げようと桂川へ。一緒に死ぬのが運命だと悟り、長右衛門も桂川へ…。

眼目となる「帯屋」では、苦悩を内に秘めた長右衛門夫婦や繁齋とは対照的に、派手に、憎々しく、滑稽に動き回る後妻親子と洩垂れ丁稚が、舞台を賑わします。前半の儀兵衛と丁稚のやりとりは、客席を笑いの渦に巻き込むチャリ場として有名。後半はがらりと雰囲気が変わり、深刻で、長右衛門、妻、養父それぞれの心情が胸に迫ります。可憐なお半が長右衛門に背負われて登場する道行にも、ご期待ください。

曾根崎心中

そねざきしんじゅう

元禄十六年（1703）、大坂の曾根崎にあった天神の森で、遊女と醬油屋の手代が心中。これを近松門左衛門が浄瑠璃にして、一月後、大坂の竹本座で初演。古い時代の事柄だけを扱って来た浄瑠璃に、世話物という新ジャンルを確立させた作品です。昭和三十年（1955）、野澤松之輔の脚色・作曲で復活されて以来、不動の人気を誇り、海外公演でも絶賛されています。

平野屋の手代徳兵衛は、天満屋の遊女お初と真剣に愛しあう仲。伯父でもある主人が継母と勝手に縁談をまとめてしまったのを知って、主人と大喧嘩。破談にはなったものの、継母が受け取った金を返すことに…。ところが、苦勞して継母から取り返して来た金を、友人の油屋九平次に、窮状を訴えられて数日の約束で貸したところ、だまし取られてしまいました。九平次の企みは巧妙。逆に証文偽造、騙りの汚名を着せられた徳兵衛は、力づくでも金を取り戻そうとして、人々の前で散々に打ちのめされ、大切な金も、面目をも失って、死を決意します。

その夜、お初は、店の外に哀れな姿を見せた徳兵衛を、襦袢うちかけの裾に隠して店の縁の下へ。お初の足元に徳兵衛が身を潜めるとも知らず、九平次は遊女たちに「犯罪者」徳兵衛の悪口を言いたい放題。縁の下で悔しさに身を震わせる恋人を、お初は足先でなだめ、ともに死ぬ覚悟を伝えます。その足を喉笛にあて、押し戴き、涙する徳兵衛。直接言葉を交わすことなく、誰にも気づかれず、足によって二人が心を通わせる―全篇の山場です。

深夜、店を抜け出した二人は天神の森へ。この世の名残、夜も名残：名文として知られる美しい道行、哀感に満ちた三味線の音が心にしみる心中。離れ離れになっては片時も生きていられず、恋を貫いて命を絶つた二人を、近松は原作で「恋の手本」と讃えました。

NHKの時代劇『ちかえもん』でも取り上げられたお初と徳兵衛の恋を、ぜひ本家の文楽で味わってください。